

教会のメンバーは、皆が、清く、正しく、美しく生きていくわけではなく、教会は弱い人間の集まりなので、この共同体もまた、人間の弱さからくるいろいろな問題を抱えている。日本カトリック司教団が出した『二十一世紀へのメッセージ』のちへのまなざし』カトリック中央協議会発行)はそのことをよく示しており、人間の弱さから生じている諸問題に対する教会の温かい心を示している▼平和旬間に講演する機会があり、先の

司教団メッセージについて話をした。講演の最後に出した具体例が一番良かった、という評価を得

## 地の塩

01. 9. 2

た。最後に出した例とは、「人の悪口を言わないようにしよう」ということだった▼もちろん、司教団のメッセージはこのこ

とには触れていないが、「悪口」や「中傷」によっても、確かに私たちが人を傷つけている。しかも日常的に、無意識のうちにも……。そして、このことは時として人の「いのち」を深く傷つけることにもなる。不思議なことに人は他人の良いことを話すときはあまりいい気持ちがないもので、かえって人の悪口や中傷をするとき、一種の快感を覚える。しかし、そうすることによって、自分もまた傷ついていることには気付いていない▼ある時、一人の青年が電話を切り終わった母親に言った。「お母さん、どうして教会の人たちは人の悪口を言っただろう。お母さんもそうだよ。そんな教会には行きたくないよ。どうして人を傷つけることをするのよ」。うわさ話や人の悪口、中傷が多過ぎる。人を思いやり、苦しむ人を助け、貧しい人を守る教会、世界を神は望まれている。人がもつと自分の弱さに見える。自分を留めるなら、他人の悪口は言えないはずなの